

【翻訳】

『生きる権利のために闘う—チンガリ・トラストの案内』

—インド・ボパール事件における被害女性たちの闘争—

藤 川 賢

はしがき

本稿は、チンガリ・トラスト(Chingari Trust)のブックレット『生きる権利のために闘う(fighting for OUR RIGHT TO LIVE)』のうち、その成り立ちにかかわる前半部分を日本語訳したものである⁽¹⁾。

チンガリ・トラストは、世界最大の工場災害と言われる1984年12月のボパール事故の被害者女性たちが2005年3月に設立したもので、現在、被害地域で障害をもって生まれてきた次世代・次々世代の子どもたちの医療や教育を補助するチンガリ・リハビリテーション・センターを中心に、被害女性の支援や全国の反公害女性運動の顕彰・ネットワーク形成などの活動を行っている。

その経緯や内容は下記の本文に書かれている通りであるが、それに先立って、このトラストが女性の被害者運動によるものであること、事故から20年目に設立されたこと、そして、事故から30年が過ぎようとする2015年現在も被害と問題が残っていることについて述べておきたい。この3点は互いに深くかかわりあっており、その関係性は、チンガリをめぐる女性たちや子どもたちの苦闘が歴史的な偶然の結果ではなく、今後も形を変えながら世界各地でくり返されるかもしれないことを示唆するからである。

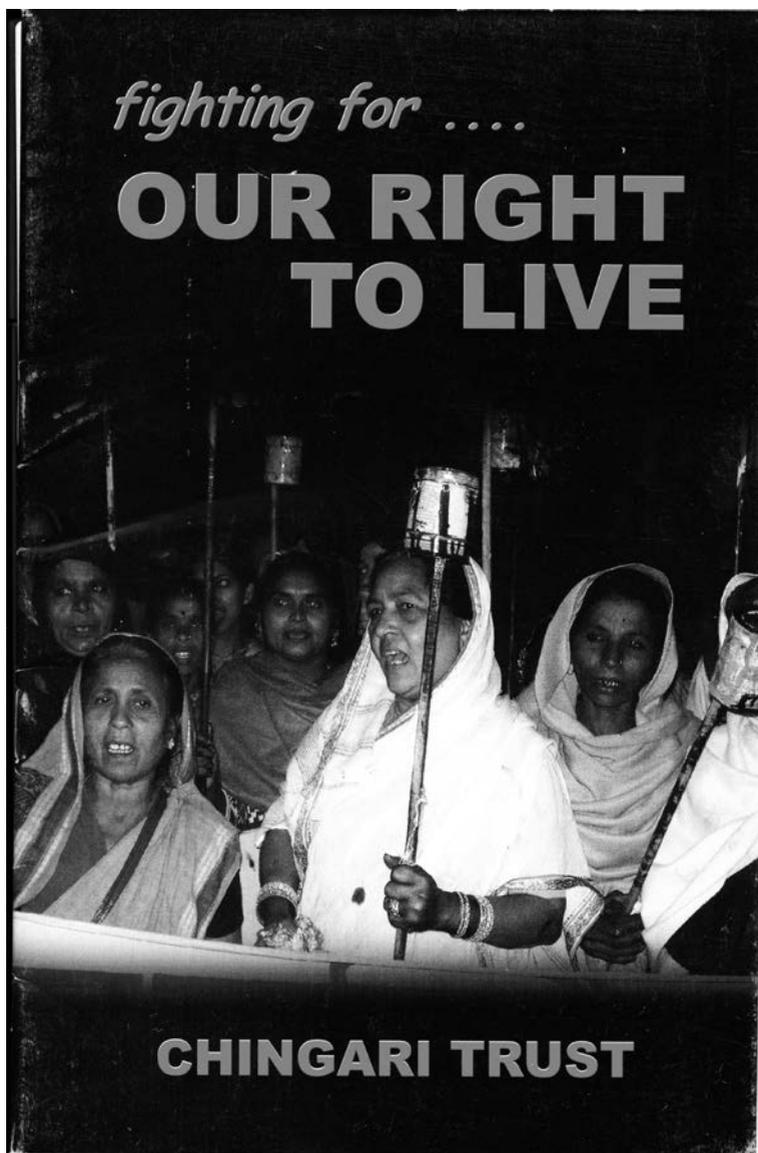
差別が弱者により大きな被害をもたらすことはつとに指摘されるどころだが、同時にこうした災害は差別の強化をもたらすこともある⁽²⁾。ボパールでも、貧困者、低位カースト、女性、高齢者、子どもなどへの差別が進んだ。そもそ

も、事故を起こした工場の親会社であるユニオン・カーバイド社はインド政府を原告とする訴訟の和解で4.7億ドルを支払っただけで、汚染土壌の浄化などもしないまま、すべて放置している。同社は後にダウ・ケミカル社に買収されており、ダウ社もこの問題は終わったものという姿勢をくずしていない。他方、現地では今なお健康被害が新たに発生しており、わずかな一時金を渡されたのみで生活の基盤も失い、医療費さえまかなうことのできない被害者家族の苦しみは今日も続いている。これら多国籍企業の社会的責任とくに途上国にたいする環境正義の問題は今日も大きな社会問題として残る⁽³⁾。

被害地域でこの問題を追及しながら家族や地域を守っているのが、多くは自らも被害を受けた女性たちであり、チンガリ・トラストもその拠点の一つである。なぜ、女性たちなのか。トラストの設立者であるラシーダ・ビー(Rasheeda Bee)とチャンパ・デヴィ・シュクラ(Champa Devi Shkula)両氏に質問したところ、その答えは、女性が家族や地域をまもる存在だということだった⁽⁴⁾。インドでは家族や地域を守る責任は、女性により多く期待される役割でもあるという。女性たちは、子どもや高齢者などの世話をしなければならない。障害や貧困の問題を抱える家庭では、その役割はとくに重要になる。それについて、長年にわたってこのお二人などとともに被害者運動を支えてきたサムバブナ・トラストのサランギ氏は、女性の役割という以外に二つの理由が考えられるという⁽⁵⁾。一つは、女性たちが自身でもボパール事故の被害を強く受けたことである。事故で放出されたMICガスの被害は男女ともに受けたが、女性が受けた身体被害の中には婦人科系のものもあり、女性がより長く、またくり返し、事故の被害を受け止めることになった。下記の本文にも出てくるように子や孫に障害が生じることもあり、それは直接的に母親の被害でもある。また、生理不順など目に見えにくい被害でも結婚などの際には差別を受けることがある。それは本人も、母や祖母も、くり返し傷つけることになる。

もう一つは、インドの女性たちが受け続けてきた差別と抑圧である。サラン

『生きる権利のために闘う—チンガリ・トラストの案内』



ブックレット『生きる権利のために闘う』(チンガリ・トラスト)の表紙

ギ氏は、「敵対的な状況(hostile situation)」に置かれたことがインドの女性たちを強くしているのだという。ボパールの被害女性もそうだった。多くの被害世帯で稼ぎ主だった男性が死亡もしくは病気になり、主婦が日々の糧を得なければならなかった。ラシーダ・ビーとチャンパ・デヴィ・シュクラの二人も、それまで家から出ることも少なかった状況から、労働者になっていった。マッディヤ・プラデシュ州政府が貧しい被害者世帯の経済的更生のために運用した職業訓練によって文具製造に携わるようになったのである。ただし、これは新しい救済制度ではなく、元からあった都市貧困者職業訓練制度を転用しただけだったので、研修期間が終わると就職の当てもないまま放り出されてしまう。それにたいして、女性たちは組合をつくって雇用の確保を求め、仕事を得てからは適正な賃金を求めて、要求をくり返さなければならなかった。被害者であり女性であるがゆえに不当に安い賃金しか支払われないことについては下記本文にも出てくるが、同様に、工場災害の被害への補償金・救済金の受け取りも女性差別とつながっていることをエッカーマンはつぎのように指摘する。

女性の地位低下。仮払い救済金の社会的影響の一つとして興味深いのは女性の地位にかんすることである。仮払金は女性の地位を低下させる効果を持ち、その支払い後の時期には女性が家長の家族が減少した。というのは、それまで女性が稼ぎ主として家長の立場にあった家庭で、仮払金によって収入を得た男性が家長として家族を支配するようになったからだろう。(Eckerman 2005: 170)

こうした社会状況下で、女性たちは闘い続けてきた。チャンパ・デヴィ・シュクラ氏は、男性が闘い続けられないことについて、男たちは最初は強く立ちあがっても長く続く困難のなかであきらめてしまい、目先の一時金などに迷いやすいことを話してくれた⁽⁶⁾。

このような経緯で、「Bhopal Gas Peedit Mahila Stationery Karmachari Sangh(ボパールガス犠牲者女性文具労働者組合)」(BGPMKS)が設立され、ラシーダ・ビーとチャンパ・デヴィ・シユクラ両氏がリーダーに選ばれる。彼女たちは、宗教や身分などによる違いを超えて団結し⁽⁷⁾、賃金などに関する主張とともに、ボパール事故の被害継続を訴え、被害者救済のために運動していく。縫製工場など他の職種での組合との連合「Bhopal Gas Peedit Mahila Udyog Sangathan(ボパールガス犠牲者女性労働者連盟)」(BGPMUS)は1990年ごろの時点で約2万人が参加する最大の被害者運動団体になっている(Fortun 2001: 2)⁽⁸⁾。

これらの運動は、しかし物理的にも政治的にも強いものではなかった。本文にもあるようにBGPMKSも、訴える手段もほとんど知らず、座り込みなどをするしかなかった。周囲の人に教えられてデモや集会を行うようになるが、なかなか功を奏することはなかった。1989年には首相に直接会うことを思いつくのだが、この時もデリーの場所も行き方も知らず、もちろん旅支度の余裕もないまま、とにかくデリーに向けて歩き出したのである(BMA & BGIA 2012: 50-51)。道中の人たちに助けられながら、生命を賭した行脚の末にたどりついたデリーでは、首相には会えず、善処を約束する議員の言葉に騙されてボパールに帰る結果になっている(ibid: 53)。だが、このようにして彼女たちは強くなっていった。無力でも闘い続けることこそが重要なのだと知るのである⁽⁹⁾。ラシーダとチャンパ・デヴィの二人は言う、「うまい演説は役に立たないばかりか、何かあるような気にさせるだけ始末に悪い」のだと(ibid: 134)。

女性たちによる数十日におよぶデモやハンガーストライキなどを含む、暴力的ではないが自らの身体を賭した抗議活動は次第に国際的にも支援の輪を広げることになる⁽¹⁰⁾。とはいえ、それにも長い時間を要している。ボパール事故は世界中の注目を浴びたので、事故当初から日本を含めた各国の支援者が現地を訪問している⁽¹¹⁾。そうした注目の中で始まった訴訟は、しかし、1989年に

補償金4.7億ドルというきわめて低額の和解で終わり、たとえば次世代への影響など多くの被害も見捨てられたままになっていく。その中で、事故後10周年にあたる1994年に欧米11カ国14人の医療関係者がボパールとデリーで調査研究を行い、ボパールの被害が継続していることを明らかにした。それを契機にイギリスに本拠を置くNPO「Bhopal Medical Appeal(BMA)」などの国際支援組織が立ちあがり、2001年にはドミニク・ラピエールとハビエル・モロ著『ボパール午前零時五分』が刊行、ベストセラーになるなどして、少しずつ支援の輪が展開してきているのである。2004年には、ラシーダ・ビーとチャンパ・デヴィ・シュクラが、“環境運動のノーベル賞”と呼ばれることもある「ゴールドマン環境賞」を受賞、その賞金でチンガリ・トラストが設立された。だが、今もなお、拡大する被害者の救済、放置された土壌・水質汚染の除去、企業の社会的責任の追及は、いずれも実現のめどが立ってはいない。その中でサムバブナ・トラストやチンガリ・トラストは、運動とともに被害者救済のための自主的な取りくみを進めている。

チンガリ・リハビリテーション・センターは、障害をもつ事故被害の子どもたちのための施設である。現在、チンガリには0歳から12歳まで約200人の子どもが通ってくる。入所を待って登録されている子どもは絶えず、毎週土曜日に入所希望の面接が行われて毎年100人くらいずつ増えており、現在では700人超に達しているのだが、受け入れ態勢がそれに追いついていないとのことである。なお、入所の対象はボパール事故にかかわる障害をもつ子であり、ただし、事故の次世代影響は公式に認められていないため、母親もしくは祖父母が事故被害者であることが条件となる。すべての専門家がその子を見て、ケアの可能性などをチェックする。

現在の施設は、州政府から公営住宅の1階部分が無償で借りているもので、廊下に沿って教室や事務室などあわせて10室ほどが並ぶ様子は学校らしくもあるが、各部屋の広さは教室というより集合住宅の居室に近い。スタッフは約30

名で、そのうち、物理療法士4名、言語療法士4名、作業療法士1名、特別教育教員4名、スポーツコーチ2名が、それぞれの教室で1名から数名の子どもを世話する。ほぼすべてのケアや教育は、教師の一律な指導のもとで統制されるのではなく、一人一人の子どもにあわせて行われるので、教室で椅子を並べる隣同士でやっていることが全然違うこともある。独力で通学できる子どもはほとんどおらず、4台の小型ワゴンが地域を巡回して送迎するほか家族に連れられてくる子もいる。このように時間も空間も人間もかぎられているので、子どもは午前と午後の2グループに分かれて来所している。その交代時には、わずかながら給食も配られる。なお、制服や教材を含めて来所者の負担は無料となる⁽¹²⁾。

被害地域に多い障碍児のケアは、チンガリ設立前からの大きな目標だったが、2005年夏に数名の子どもの世話をした時、その効果があまりに大きかったため、来所希望も多く、現在のように展開してきた。それぞれの子どもにあわせたケアのおかげで、たとえば物理療法によって、座ることさえできなかった子どもが1年ほどで歩けることも珍しくない。そのためには、縮んで曲がってしまった手足を伸ばし、少しずつ訓練する必要がある、チンガリに来た時だけでなく、家でも治療ができるよう、ケアの場に親がついている場合もある。

特別教育も、それぞれの発達段階と必要に応じた教育がなされる。そうやって、動けなかった子どもが走れるようになったり、口のきけなかった子どもが欲しいものを言葉で示せるようになったり、基礎的な読み書き計算の能力を身につけることは、子ども成長のためにも、家族のためにも、大人になってからのためにも、重要な意味をもつ。こうしたケアの成果の一例として、チンガリにはスポーツ大会で活躍した子どもたちのトロフィーなどが多数飾られている。

現在、チンガリは上記の賞金にもとづく基金のほか、サムバブナと同じくBMAなどから寄せられた寄付によって運営されている。子どもたちの希望を

示す言葉やスポーツ大会などでの活躍、あるいは抗議活動への参加などは、そのまま被害者運動、支援の呼びかけにもつながっている。

『生きる権利のために闘う』(翻訳)

【序—チンガリ・トラストについて】

このブックレットは、チンガリ・トラストがいかにか、そしてなぜ、生まれてきたのかを語るものです。

その物語は、「Bhopal Gas Peedit Mahila Stationery Karmachari Sangh (ボパールガス犠牲者女性文具労働者組合)」(BGPMSKS)とともに始まります。自分たちの生活を守るための労働闘争の中で、彼女たちはすぐに、ボパールの悲劇が彼女たちから人並みの生活をする能力を奪っただけでなく、健康や福祉も奪われてしまったことに気づきました。政府もユニオン・カーバイド社も、事故犠牲者に適切な職を与えること、悪化する病気を治療すること、工場の化学廃棄物によって汚染された土壌や水質を浄化することについて、何の責任も取ろうとしませんでした。労働者たちの企業にたいする闘争は、国内のあらゆるところに、そして世界にまでも、広がっていったのです。

ユニオン・カーバイド社(現在のオーナーはダウ・ケミカル社)は、母国アメリカの庇護に隠れて事故後あっさりとインドから逃げ出し、ボパールとガス犠牲者に対する責任を無頓着に投げ出しました。しかし、同社が放出した毒物は残っており、そのガスがもたらした犠牲者たちの身体や精神や生活上の大混乱は今日も明らかなのです。何千世帯もの家族が健康と生活への不安を抱え続けており、その日常生活が生きるための闘争になっていったのです。

この苦しい状況のもとで、ボパールの女性たちは無責任な企業の行為による科学的汚染の危険から逃れるための過酷な苦闘に挑む、その先頭に立ってきました。それを導いたのはRashida Bi(ラシーダ・ビー)とChampa Devi Shukla

『生きる権利のために闘う—チンガリ・トラストの案内』

(チャンパ・デヴィ・シュクラ)の二人です。彼女たちのたゆまず、ぶれることのない目的意識が世界的に認められ、2004年、インド政府、ユニオン・カーバイド社、その後継のダウ・ケミカル社という複合勢力にたいするボパール犠牲者の正義に向けた持続的な闘争を理由に、ゴールドマン環境賞(環境運動のノーベル賞として知られています)を受賞しました。

ガス犠牲者であるこの二人は、どちらも家族唯一の稼ぎ手であり、深刻な健康問題に直面しているにもかかわらず、この賞金(125,000ドル)全額をガス犠牲者の福利のために寄付しました。インドの企業犯罪に挑み続ける彼女たちの努力に賛同する女性活動家に加わって、チンガリ・トラストが設立されたのです。

チンガリは女性だけによるトラストで、ボパールの犠牲者の回復する力、とくに女性たちの服従と敗北を拒否する精神をあらわすものです。彼女たちが抗議活動で叫ぶ言葉がトラストの名前であり、そのシンボルであり、彼女たちの不屈の勇気を象徴しています。

Hum Bhopal ke nari hain,

Hum phool nahin, chingari hain.

(私たちはボパールの女、

私たちは花ではない、私たちは炎)

チンガリとは、まさに炎であり、産業界の無責任な態度や犯罪的な行為にたいする闘いのために、世界に火をつけ、燃え立たせるものです。それは、一人一人がこの闘いに参加し続け、それを強め、世界中に広げる思いを燃やすための火花です。

チンガリ・トラストは、カーバイド工場から放出された有毒ガスの遺伝的な影響によって心身の障害や奇形をもって生まれてきた犠牲者の子どもに医学的

救済やりハビリを行うことを大きな責務としています。

もう一つの目的は、生計をめぐる被害女性たちの闘いを支援することです。事故によって、家族を養わなければならなくなった無数の女性たちが存在するのです。そうした被害女性たちのために、エコロジカルに持続可能で社会的に公正な生計の機会をつくっていきたいと考えています。

そして、同じく重要な点として、トラストでは、企業犯罪に対抗する女性へのチンガリ賞を設立しました。これは、企業犯罪にたいする人びとの闘いを指導・支援している全国の女性活動の努力を顕彰しようとするものです。

チンガリ・トラスト

【Rashida Biの物語】

私は、1956年にマッディヤ・ブラデシュ州Hashangabad地区のSohagpur tehsilに住むとても貧しい家族に生まれました。父は果実を売っていましたが、私が7歳のときに大怪我をして果実を売り続けることができなくなってしまいました。

私の家ではパルダ制(パルダはベールのこと。女性を他人の目から隔離する習慣)にしがっていましたが、私が学校に行くことはありませんでした。その代わりに糸を巻くことを教わりました。10歳の時には、もう糸巻きで家族の生計を助けていました。1000個を巻くと2ルピーが与えられるのです。ですから、私たちは一日に2食を満足に取ることさえできないこともありました。

私が12,13歳になると、両親は私を結婚させることを考え始めました。あまりに貧しかったので満足な結婚の申し込みを得ることもできませんでしたが、ボパールに住む、私たちと同じくらい貧しい家族からの申し込みがあったのです。相手の少年は仕立て職でした。母方の伯父が、父さえ了承すれば話をまとめてやると言いました。

私の父はその申し込みを受け入れ、伯父は結婚の費用に13ルピーくれました。

このようにして私は、1970年にボパールの仕立て職人のもとに嫁いだのです。不幸なことに、夫は仕立ての仕事を知っていましたが、仕事はしなかったので、お金を稼ぐこともありませんでした。私の実家と同じように、婚家も糸巻きで生計を立て、パルダ制にしたがっていました。嫁ぎ先ではしばしば、私は1000から1500の糸巻きをするまで何も食物を与えられないこともあったのです。

私は、物事というものはそういうものだと思っていたし、働かなければ食物を得ることもできないと信じていました。義母は、出産の費用も私が自分で何とかしなければならないと私に警告していたものでした。そして、私は義母を疑うことも、何か義母に言うこともありませんでした。怖かったからです。

結婚して5年後に、私はスルタニア病院で男の子を出産しました。医師は私に、子どもを生かしておきたいのなら(地域でもっとも大きい)ハミディア病院に連れて行かなくては行けないといいました。しかし、私は病院に行きませんでした。婚家が家から出してくれなかったのです。このようにして私は最初の子どもを誕生まもなく失いました。

私が結婚した人は、少し頭の弱い人でした。彼はふらっと家を出て、3、4年帰らないこともありました。ですから、私は大方の時間を彼の両親とともにボパールで過ごしていたのです。実家の失業中の父は、仕事を求めて家族で都市に移り、Jogipura Budhwaraに住んでいました。

私の夫には2人の兄と、弟と妹が1人ずつました。夫の精神状態のせいで、義兄たちは私のことも完全に軽視していました。義母は、姻戚とはそんなものだといいました。時には夫が少し仕立ての仕事をすることもあるのですが、そんな時、義兄たちが勝手にお店に行き、夫の賃金を全部取ってってしまうのでした。

ある晩、私は糸巻きをしながら寝入ってしまっていたようです。突然、人々が叫んでいるのを聞いたのです。「走れ、走れ、さもないとやられてしまうぞ。」私の甥(義妹の息子)が最初に起きだしました。彼の目からは水が流れ出ていま

す。彼は、誰かが唐辛子を焼いたような感じだと言いました。私たちは、何が起きたのか、まったく知りませんでした。甥が外に見に出ると、すぐに戻ってきました。人々が慌てふためいて走っていて、みんな死んでしまうぞと叫んでいるというのです。家族全員、急いで走り出しました。

私たちがPul Bugdaについたとき、私の目は閉じられてしまっていました。痛くて目を開けることができないのです。何とかこじ開けてみたとき目に入るのは、いつも、ばら撒いたように積み上げられた死体です。人々はその上を、目が見えないかのように走り超えていました。

私も、目を開けることができず、何も見えないまま走りました。そのとき、ユニオン・カーバイドの工場からもれ出たガスが止まったというアナウンスを聞きました。この日が、私がユニオン・カーバイドの名前を耳にした最初でした。それまで、この工場については何も知らなかったのです。

家族はまごつきっぱなしで、何をすればよいのか、どこへ行けばよいのか、途方にくれたままでした。そんなときに車が来て、私たちを病院に連れて行ってくれました。

事故から13日後、12月16日にボパールから再び避難しました。私は、父とその家族とともにSohagpurに行きました。そして、6か月後に私たちは再びボパールに戻りました。というのは、父は吸い込んだガスのせいで身体がひどく傷んでしまったからです。父はガンに苦しみました。私の夫の足は壊死し始め、夫はミシンを踏むことができなくなってしまい、疲れきって倒れ、息をするのにあえいでいました。

家には、働いてお金を稼ぐ男性が残されていませんでした。そこで、私の弟が鍋店で働き始め、一日に15ルピーを得るようにしました。残った私たちは糸巻きを続けました。しかし、糸巻きをしても、ガンで食べ物を口にすることができなくなった父の牛乳を何とか買うだけのお金にしかなりません。

政府がガス被害者の雇用のための計画をアナウンスしたのは、その時でした。

被害者たちはBharat Talkiesの「文具製造」に名前を登録していると、ある女性が教えてくれたのです。私は、それが家から500メートルほどのところにあることも知らず、彼女にBharat Talkiesの場所を聞きました。彼女は、私に道々訊きながら行くようにといました。そして、私は家の外に冒険し、必死に道を尋ねながら何とかたどり着き、「文具製造」に私の名前を登録したのです。

このようにして、私は人生で初めて、家の外に連れ出されました。私の惨めな苦境は、私たちが十分に食べることさえできずに、児童保護制度によって子どもたちに配給されるパンとミルクに頼って生き延びるしかないという事実を確認するものでした。それは、私の人生における第二の苦闘の幕開けの瞬間でもあったのです。

【Champa Deviの物語】

私は1952年5月16日、マッディヤ・プラデシュ州のジャバルプルに生まれました。私は10学年まで学校に行っていました。13歳のとき、Jhansiの家族に嫁ぎました。5人の子ども、息子3人と娘2人を出産しました。夫が仕事をして家族の掛かりを支えてくれました。家庭は良好でしたので、私が外で仕事を見つける必要はなかったのです。ただし、裁縫や刺繍などの家の中でできる仕事はしていました。

夫には定職がなく、日給での労働でしたので、ひとつの都市から別の都市へとしばしば移動していました。あちこちで、仕事を探さなくてはならなかったからです。しかし、それは私にいろいろな都市での生活や、外の世界での経験を与えてくれたということでもあります。

1972年に夫はジャバルプルの農業部門で仕事をしていました。幸運なことに、そこで定職に就くことができ、ボパールに赴任したのです。私にははじめての都市でした。夫がRasaldar Colonyに部屋を見つけてきて、私たちはそこで暮らし始めました。

外に出て仕事を見つける必要がなかったので、私は主婦として生活していました。しかし、家事をした後のちょっとした時間を使って、裁縫と刺繍の仕事は続けていました。このようにして、7年の月日がたちました。

私たちが住んでいた建物には5世帯が入居していました。私はすぐに隣人たちと知り合いになり、友達もできました。私たち女性は、お互いに訪問しあったり、いろいろ一緒にやったり、また食べ物もいろいろシェアしていました。次第に、買い物にも一緒に行くようになり、夏の間には市内の別の地域にまで冒険することもありました。ある晩、J.P.Nagalをうろうろしていたとき、私たちは、高い植物に囲まれた広大な敷地の中央に立つ小さな工場に気がつきました。そこには、名前が書かれていました。ユニオン・カーバイドと。その地域は私たちが夕方歩き回る定番ポイントになり、年を経るごとに、その工場がどんどん大きくなっていくのを見ていました。多くの人がそこで働くようになり、それは巨大施設へと成長していきました。

そういう日々の中で、日常に使う水を確保することは、大きな問題でした。人びとは、飲み水を得るためにさえ、かなり長い距離を歩かなくてはならなかったのです。ある日、あの工場の裏手の池には大量の水があると、誰かが教えてくれました。私たちは、そこで洗濯することに決めました。

それは日常の家事になりました。しかし、私たちは、洗濯するたびに手が火傷のようになり、小さな水泡ができることに気がつきました。私たちには、なぜそんなことが起きるのか、手がかりすらなく、洗濯し続けていました。このようにして、10年が経過していきます。

1982年のある日、工場から火の手が上がりました。激しい炎が25～30フィートも舞い上がり、濃く、黒いスモッグの雲が都市全体を覆いました。人々は恐れられました。工場の中にはガスが貯められたタンクがたくさんあり、火事はそのタンクにまで広がったら、ボパールは大惨事になると、人びとは言いました。その火事は、相当な困難を伴いましたが最終的には何とか鎮められました。

ある年、工場からガスが漏れ出て、一人の労働者の生命を奪いました。彼の家族にはいくらのお金が支払われ、その問題は抑えられました。しかし、夜の空気がいつもガスのおいで重くなっていることに、私たちは気がつき始めていました。その空気を吸い込むたび、私たちののどにはその感覚が重ねられていったのです。

ある日曜日、一日の活動も家事も終えて、家族みんなで夜のテレビ番組を見て、疲れて床に就きました。それが1984年12月2日でした。

その夜、12時半ごろでした、隣の家の息子が息せき切って家に入ってくると、私たちみんなを起こしました。「急いで、家から出るんだ、さもないと、みんな死んでしまうよ」と叫んだのです。私たちがドアを開けると、とたんにガスが家の中にほとぼしってきました。私たちは咳きこみ、目が焼けつきました。息をするのさえ苦しかったのです。まさに着のみ着のままに家から走り出すと、バススタンドを目指して走り出しました。

外はすべてが大混乱でした。すべての人が走っていて、とにかくこの場所から少しでも遠くへ逃げて、生き延びようということだけしか考えていません。ほかに道はないようでした。何しろ、死のダンスはすでに始まっていたからです。

人々は走り、咳きこみ、叫んでいました。彼らの泣き声が夜空に響いていました。「Ramよ、私に死を」「アラーよ、私に死を」その夜、死は、すべての人にとって歓迎すべき救いにさえ思われたようです。

私たちも、年長の息子たちの先導で、バススタンドまで走りました。夫と末息子、娘たちと私は、少し遅れて集団でついていきました。とてつもない困難の中、ずいぶん走ったところで、私は目が開かないことに気がつきました。白く重い霧と、前を行く人間の集団のほかは、何も見ることはできません。倒れた者は、地に横たわり、誰もそれを助けることはありません。

こけつまろびつしながら、私たちは何とかバススタンドまでたどり着きまし

た。夫は敷石に倒れこんで、大きな叫び声をあげました。無理やり目を開けてみると、夫は痛みに震えています。どうしたのかと訊くと、あえぎながら、倒れたときに胃を深く傷つけたのだと言いました。

私はすべての希望を失い、呆然と座り込みました。2人の娘の口からは白い泡が吹き出しています。妹のほうは倒れてしまい、意識もありません。それでも何とか神が私に自分のことを忘れる力を与えてくれたようで、私は、夫と娘を助けようと思いました。近くのパイプから水が滴っているのをみつけ、娘のスカーフを取ってその水に浸し、夫と娘の目と口をぬぐっていったのです。すると、直ちに生き返り、妹も意識を取り戻しました。

誰かが私たちを車に乗せて、ハミディア病院に連れて行ってくれました。病院の外の広場は人間でいっぱいでした。人々の叫び声と泣き声で夜の空気が振動しているほどです。死体は、まるで倉庫の小麦の袋のように積み上げられていました。倒れて、気を失っている者は、その山に積み重ねられていくのです。医師たちも、その状況にどうすればよいのか、どんな治療ができるのか、まるっきり分からないようでした。私は、恐ろしくなりました。私たちも、あの死体の山に積み重ねられてしまうのでしょうか。まさに、その考えが私を行動に駆り立てたのです。私は夫と子どもを連れてオートリキシャに乗り、家に向かったのです。

私たちは全員、家で倒れていました。夫の状態はとくに悪かったのです。目からは液体が流れ出し、小便をコントロールすることもできなかったのです。バスルームに椅子を置いて、そこに座らせておきました。義妹がその日に来て、私たちの世話をしてくれました。私の両目がちゃんと開くようになるまで8日かかりました。

私は夫をハミディア病院に連れて行きました。診察したお医者さんたちは、夫が胃を傷つけた時に膀胱を壊したのだと言いました。しかし、何もできないというのです。手術をすれば命にかかわるとのことでした。このままの状態で

生きていくしかないというのです。それは、昼間はコンドームをつけて椅子に座ったまま、夜は尿管をつけて寝るしかない、ということです。

4,5年後に、夫は膀胱ガンと言われ、結局その病気で1993年に亡くなりました。長男もずっと胸の痛みで苦しんでおり、肺がひどく傷つけられてしまっていたために常に鬱状態でした。苦しみに耐えかねて、彼は1992年5月5日に、リン化アルミニウム殺虫剤の錠剤をのんで自らの生命を断ちました。末娘もガスを吸った後、6か月麻痺が続きました。治療をしましたが、今も彼女の唇はねじれたままです。末息子のSunil Kumarもガス漏出の被害者で、交通事故にあって亡くなりました。

このように短期間に悲劇が続き、多くの命が失われました。私は、人生が終わってしまったかのように感じ、精神的なマヒ状態にありました。しかし、周囲の家族を見て、私と同じようにガスで愛する者の命を奪われた人たちが実に多いことに気がついたのです。人生は、続いていかなければなりません。そこで、私は残りの半生をボパールのガス被害者への正義のために闘うことにささげようと決意したのです。

【政府はどのようにボパールのガス被害者を欺いたのか】

ガス漏出から3か月後、政府はガスで被害を受けた家庭の女性たちに職を与える計画を始めました。地区産業センター(DIC)の査察官がガス被害にあった女性のリストをつくるために一軒ずつ戸別調査をすることになり、そのリストが管区に提出されました。

管区がそのリストを承認して、私たちは3か月間の訓練に召集されました。私たちは女性100人で、ムスリムとヒンドゥーが50人ずつでした。訓練期間中は、月150ルピーの給付金が支給されました。ところが、その期間が終わると、DICの役人は私たちに荷物をまとめて帰宅するようというのです。銀行で資金を借りて仕事を始めることができるだろうと、彼らは言いました。私たちは

怒りました。そのための訓練も何もしてくれずに、いきなり銀行で資金を借りて自分たちで仕事を始めるように言うなんて、私たちは即座に拒絶しました。

私たちは役人たちに、ガスの被害にあったのは私たちの自由な意志ではなく、この苦境は自分たちのせいではないのだと訴えました。私たちは雇用を求め、仕事が与えられるまでは一歩たりとも動かないと言ったのです。そして、私たちは組合をつくりました。後の1987年3月17日にインドール市で登録されています。私たちの組合は「ボパールガス犠牲者女性文具労働者組合」と名乗り、ラシーダ・ピーが代表に、チャンパ・デヴィ・シュクラが書記に選ばれました。

私たちはマッディヤ・プラデシュ州前首相のMotilal Voraに仕事を与えるよう求めました。彼は州の産業連合から出来高払いの仕事ができるよう設定してくれました。私たちは11か月毎日出勤し、名簿に登録しました。しかし、その無駄に気がつくことになったのです。

最初の1か月がたち、私たちに支払われたのは6ルピーでした。私たちはそれを拒否しました。それが苦闘の始まりで、私たちは徐々に得るものを拡大していき、ようやく月に150～200ルピーを得られるだけの仕事を手にしたのです。

そうして2年半が過ぎ、私たちは、産業局が私たちの出来高払いの仕事から40万ルピーの利益をあげていることを知るようになりました。私たちは役人に、それは私たちのお金なのだから、その権利があるはずだと申し出ました。しかし、役人たちは私たちの嘆願を聞こうとはしません。そこで、私たちは1988年5月30日に事務官室の前で座り込み、ハンガーストライキでデモンストレーションを示したのです。ハンガーストライキを始めて27日目に、Arjun Singh前州首相はわれわれの担当部局を政府印刷局に移しました。

印刷局の雇用者はだいたい私たちがしてきたのと同じような仕事をしているのですが、その賃金が2400ルピーなのに、私たちにはわずか532ルピーしか支払われていないことに気がつきました。私たちは、なぜこんな継子いじめのよ

うなことが行われるのか、その理由を問いました。すると役人たちは、
ずけずけと、ガス被害者なのだから受け取れるのはそれがすべてなのだ
と答えたのです。それは明らかにアンフェアだと私たちは思い、私
たちは再び事務官室の前で座り込みをすることになります。この時
には、ガス犠牲者にたいする医学的治療、雇用、そしてリハビリテ
ーションも要求項目の中に入りました。

州政府は、われわれの要求に何も答えませんでした。そこで、私
たちは、国の首相に会うためにデリーに向けて行進することを決めた
のです。そのつらい旅は、1988年6月1日に始まりました。道中、あり
とあらゆる困難に苦しみながらデリーに着いたのは1か月と3日後の
ことでした。デリーで、私たちはラディブ・ガンジーに会うことは
できませんでしたが、その時デリーにいたマッディヤ・プラデシュ
州の首相には会えました。州首相は、私たちに法にかなった権利が
与えられるようにすると約束して、家に帰るように言いました。私
たちはポパールに帰ったのですが、その約束は空約束に終わりました。
ポパールでは州首相は私たちとの面会を拒否したのです。

1990年に、私たちはジャバルプルの人民法廷に訴訟を起こしまし
た。7年後、法廷は私たちに訴える場所が間違っていると伝えてき
ました。労働裁判所か高等裁判所に訴えるべきだということです。そ
こで、私たちは高等裁判所に訴えました。3年後、私たちは再び訴
える場所が違っているとと言われてしまいます。

結局、私たちは2000年に労働裁判所での訴訟を起こしました。そ
して、2002年12月8日、労働裁判所は私たちに有利な判決を下し
ました。私たちの要求を認めて、政府に対し、私たちを製本補助の
ポストにつけて、2年間の未払い分を支払うように命じました。政
府印刷局は、その判決を不服として、産業裁判所に控訴しました。
7か月後、産業裁判所も私たちの訴えを認めたのですが、それでも
政府は私たちの要求にしたがうことを拒絶しました。この訴訟は、
現在も高等裁判所で係争中です。

【悲痛の共有と闘いへの勇気】

ボパールガス犠牲者女性文具労働者組合で働く女性たちは、ガス被害を受けたすべての家庭から来ています。きわめて自然に、女性たちはガス漏出に関連する家族や職場での諸問題について話し合うようになりました。継続するガスの影響によってスラム街で当たり前のようになっている死について、新しく出現してくる病気について、病気のために学校をドロップアウトしてしまう子どもについて、うまい結婚相手を見つけられないガス被害の女の子たちについて、などなどです。

私たちは、人生の旅路において略奪され、退けられ、助けのないまま放ってこられたのだと感じていました。

しかし、私たちの苦境には別の側面もありました。現状を見るのに、別の見方もあったのです。それは、仲間で助け合い、正義のために闘い、私たちに与えられるべきものを要求していくことです。これが、ボパールガス犠牲者女性文具労働者組合が挑んできた戦闘です。私たちの主張を人々に、世界に、伝えてきたのです。私たちは、経済的共有をしてきただけでなく、私たちの健康と生活を奪ってきた犯罪の、その罪を追及するためにも闘ってきたのです。

私たち組合の女性のほとんどは、読み書きができないか、せいぜい小学校までの勉強しかしていません。でも、何とかして自分たちの要求を書きしるし、政府や法廷に訴状を持ち込んできました。絶え間ない努力と献身は、経済的問題を超えたところにまで私たちの行動の視野を広げてくれたのです。今日、私たちメンバーは、ガスの影響を受けた家族に広く見られる問題について話し合っています。たとえば、ガス犠牲の家庭における高頻度の出産異常は、ガス漏出の直接的な結果もしくはカーバイドの工場による水質汚染の結果であることに気がつきました。私たちは、仲間の中でそれらについて話し合うのですが、しかし、問題の直接的な解決方法を考えることはできません。

真実は、少しずつ姿をあらわしてきます。私たちの身体から毒を取り除く魔法のような治療法はありません。汚染された土壌や水を素早く浄化する方法はありません。私たちの身体に毒は残り、これからも一定数の子どもたちが先天異常をともなって生まれ続けてくるでしょう。私たちは、先天異常や障害への対応にはお金がかかり、そういう子どもたちには特別な医学的設備が必要であることに気がついています。ガス犠牲者への対応のために設立された病院を見渡しても、そういう設備はありません。

2000年に、チャンパ・デヴィ・シュクラの孫は先天異常をもって生まれました。その女の子Sapnaには唇も、口蓋も、胸郭もありません。チャンパ・デヴィは、その子をひざ掛けでくるみ、その子の口に綿を詰めて、その上から少しずつミルクを滴らせることで、食道から胃へと流し込み、その子を生きながらえさせてきたのです。幸いなことに彼女のところは拡大家族ですから、誰かが常にその子を見守り、時々そうやって飲み物を飲ませて、栄養を補給することもできます。

ほかの多くの世帯にも似たような苦勞があります。そして、こうした特別な苦勞に対処し、その責任を取らせられるのは女性なのです。女性たちは、家族が健康できちんと暮らせるように世話しなくてははいけません。そこには選択の余地も、支援体制もないのです。そして、お金を稼ぐ男たちが死んでしまっていたり、身体をやられていたりすれば、女性たちには、生計を支えることさえ降りかかってきます。たとえ、ガスの被害によって、健康をむしばまれ、働く能力が奪われてしまっているとしても、です。

このことが、私たちの組合には、障害をもって生まれてきた子どもたちを確実に世話していく責任があり、ガスの被害を受けた女性たちが生計をたてるための雇用を確保するよう助ける責任があると感じる理由なのです。

今日、私たちは組合として登録されています。Rashida ApaとChampa Didi(と私たちは愛情を込めて呼んでいます)のリーダーシップのもとで、私たちの

組合は社会活動団体として展開し、他の被害者団体とも連携して、正義と生の尊厳を求めて世界に働きかけているのです。

注

- (1) ブックレットはA5版で35ページ、発行年の記載はないが2007年末～2008年前半の作成と推測できる。同トラストのウェブサイトは、<http://chingaritrustbhopal.blogspot.jp/>。また、ロンドン近郊に拠点を置く支援団体 Bhopal Medical Appeal (BMA)のサイトからも紹介をみることができる(<http://bhopal.org/>)。いずれも2015年8月18日最終確認。
- (2) これは古今東西を問わず多くの被害に共通し、たとえば東日本大震災にかんしても「東日本大震災女性支援ネットワーク」などがいくつかの報告を行っている。
- (3) この点については、国際支援団体のネットワークである International Campaign for Justice in Bhopalのサイトが詳しい(<http://www.bhopal.net/>、2015年8月18日最終確認)。本文中に記したとおり、これらの国際的支援は1989年の和解、1994年の10周年を機に拡大してきたもので、先進国内における草の根環境運動、環境正義運動などと密接な関係をもっている。2014年の30周年の際には、欧米の各地でも集会が行われたという。
- (4) 2013年2月28日ヒアリング。なお、本文中にも見られるとおり両氏の名前の表記には揺れがあり、訳文中ではそれぞれの原文表記にしたがった。
- (5) 2013年2月27、28日ヒアリング。なおサムバプナ・トラスト・クリニック (Sambhavna Trust)は事故翌年に被害者たちが設立した自主診療所に端を発し、現在も、BMAなどの支援やチンガリなどとの連携の中で被害者運動や医療活動の拠点となっている。そのマネージャーであるSathyu Sarangi氏は、自主診療所設立当初から現地で支援を続けてきた方である。
- (6) 2013年2月28日ヒアリング。ただし、言語の違いがあり、細部まで正確ではない。
- (7) ラシーダ・ビー氏がそうであるようにボパール被害者にはムスリムが多い。インドのムスリムは、歴史的にヒンドゥの低カーストから改宗した人が多いと言われ、両者の間には対立や差別も存在する。ボパールはもともとムスリムの割合が高い都市であるが、とくに貧困層の多かった被害地域ではヒンドゥとムスリムの割合がほぼ半々になっているという。
- (8) BGMUSの構成員はすべて女性だが、彼女たちは男性のリーダーを選んでいる (Eckerman 2005: 208, Fortun2001: 237)。活動の大きさや継続性にもかかわらず女性たちの運動が公的に重視されていないことは、ボパール事故の被害拡大とも深くかかわっている。

『生きる権利のために闘う—チンガリ・トラストの案内』

- (9) インタビューで強調されたのも闘い続けること(Fight,Fight,Fight)だった。
- (10) ただし1989年2月にインド政府とユニオン・カーバイド社の和解が基本的合意に達した時、あまりに企業に有利な和解に反対する被害者たちがデリーのユニオン・カーバイド社事務所に暴れこんで窓ガラスを割る、机や電話を壊すなどの行為を行った。それには女性も参加しており、新聞には「戦闘的なボパールの母親たち」などと報道されたという(Fortun 2001: 238-239)。
- (11) 日本もその重要な一員であり、「アジアと水俣をむすぶ会」や労働関係の団体などが今日まで支援を続けている(ボパール事件を監視する会1986)。
- (12) 2015年2月25日ヒアリング。

文献

ボパール事件を監視する会(1986)『ボパール死の都市—史上最大の化学ジェノサイド』技術と人間。

Bhopal Medical Appeal et al. (2012) *The Bhopal Marathon: A Cry for Bhopal*.

Chingari Trust (n. d.) *Fighting for Our Right to Live*.

Eckerman, Ingrid (2005) *The Bhopal Saga*, Universities Press.

Fortun, Kim (2001) *Advocacy after Bhopal*, University of Chicago Press.

藤川賢(2012)「公害解決過程の事例比較に向けた意義と課題：インド・ボパール事件と日本の公害から」『明治学院大学社会学・社会福祉学研究』137：pp.19-46。

謝辞・付記

このブックレットの翻訳紹介を快諾し多くの教示をくださったChingari TrustとSambhavna Trustの方々に改めてありがとうございますと感謝申し上げます。本稿は、学術振興会・文部科学省の科学研究費(課題番号24530665, 15H02872)にかかわる研究成果の一部である。

